

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16738

研究課題名(和文) 契丹文字データベースの構築と契丹語の文法記述

研究課題名(英文) Construction of a Khitan Materials Database and Linguistic Description of the Khitan Language

研究代表者

武内 康則 (Takeuchi, Yasunori)

京都大学・白眉センター・特定助教

研究者番号：40725371

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：契丹語の言語資料は、契丹文字で記された資料および漢文資料中に漢字による音写によって残されている。現地調査によって契丹文字資料の収集を行い、契丹文字資料の整理とデータベース化を進展させた。さらに、収集した言語資料を契丹語の音韻論・形態論・語彙の観点から言語学的に分析し、研究結果を論文にまとめて発表した。公刊論文では、1)契丹語の音素配列、2)複数を表す接尾辞、3)方角を表す語彙、4)数詞の再建、などの事柄を扱った。

研究成果の概要(英文)：The Khitan language is generally recognized as an undeciphered language whose sources are written in the Khitan scripts or phonetically annotated in Chinese characters in Chinese documents. Several problems in Khitan grammar, including phonotactics, plural suffixes, direction terms, and numerals, have been solved during this three-year project by conducting linguistic analyses of the data collected from Khitan script materials. These results have been published as academic papers.

研究分野：言語学

キーワード：契丹語 契丹文字 歴史言語学 言語再建 モンゴル諸語

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 学術的背景

「契丹」は北アジアから中央アジアにかけて存在した遊牧民族であり、10世紀に契丹国・遼(916-1125)を建設した。契丹国においては、漢字をもとにして契丹文字が作製され、遊牧民である契丹人と定住民である漢民族の接触によって独特の制度が形成された。そのような契丹のユニークな文化は様々な研究分野より注目されてきた。彼らの使用した契丹語は、モンゴル諸語と関係があると考えられており、契丹語は初期モンゴル語史を明らかにするうえで重要なデータを提供することになる。契丹語は、未解明の部分が多い契丹文字によって記された資料が主体であると言える。したがって、契丹文字の解読は言語学における重要な課題の1つと考えられている。また、契丹文字は後の女真文字や西夏文字の作製にも影響を与えたと考えられ、その文化的意義は大きく、その研究はこれらの文字の形成原理を解明する上でも重要である。

### (2) 契丹文字研究の現段階

2000年代以降、契丹文墓誌が多数出土し、契丹文字資料を利用した契丹の歴史・言語に対する研究への関心が高まってきた。契丹文字は、「契丹大字」と「契丹小字」の2種類の文字体系からなる。契丹大字は出土資料に乏しく文字素も多いために、異体字の整理など基礎的な研究も十分になされておらず、未解明の部分が多い。これに対して契丹小字は出土資料が契丹大字と比べて多く、語の境界が明瞭で文字素が少ない表記システムであるため、解読はより進展している。契丹小字を構成する主要な文字素に関しては、それらの表示する発音や意味が特定されているが、十分に信頼性のあるとは言えない解読も含まれており、更なる研究が必要である。

### (3) 契丹語に対する研究動向

契丹文字に対する理解が進み、文字表記の背後にある契丹語自体に関する研究も増えてきている。契丹語はモンゴル諸語と親縁関係にあるという意見があり、実際にこれまでに解読された語彙や形態論の一部はモンゴル諸語と近似していることが明らかとなっている。一方で、契丹語がモンゴル諸語と共有していない独自の特徴を持っていることも判明しており、初期モンゴル語史を研究する上で重要な位置にある言語と考えられている。契丹語の形態論に関する研究は、主として契丹文字資料の解読により進められてきたと言えるが、文字の推定音価などに関して研究者の見解が異なっている部分もあるため、推定音価に基づき行われる形態論の分析についても意見が一致していない部分が多い。

### (4) 研究環境と課題

契丹文字・契丹語に関する研究環境については、これまでの研究を総括した契丹文字の辞典や契丹語の文法・辞典などの基礎的な研究資源が十分ではなく、それらを整備することが更なる研究の進展に不可欠と言える。新出の契丹文字資料は研究論文や図録などによって発表されることが多いが、必ずしも高品質の原石写真や拓本が利用可能であるわけではなく、手書きあるいは契丹文字フォントを使用した録文のみが公表されている資料もある。現段階では、個々の文字の解釈についても研究者の意見が一致していない部分もあるため、録文のみを利用して研究を進めるのは難しく、研究を進める上で原石調査が必要な場合が多い。

### (5) 契丹文字の電子的情報処理

契丹文字の電子的情報処理に関しては、研究者がそれぞれ独自に契丹文字フォントを作成しテキストの作成や出版物で使用しており、研究者間での文字データの共有ができる段階に達しているとは言えない。特に、契丹大字に関しては、契丹小字と比べ文字素の数が多く考えられているのに加え、フォント作成の基礎となる文字素のリストがまだ作成されていないために、電子的情報処理を進める上で課題が多いと言える。また、契丹文字の Unicode 符号化提案も現在議論が進められているが、必ずしも契丹文字の専門家の意見が十分に反映された提案とはなっていない。

## 2. 研究の目的

### (1) 契丹語研究資源の整理

契丹の各専門分野の連携を推し進めるため、基礎的な研究資源を構築することが本課題の目的の1つである。

#### 文字データベース

契丹文字の異体字辞典などの作成に向けた字形データベースの構築を行う。契丹小字に関しては先行研究により文字素の整理が行われてきたが、契丹大字に関しては十分な研究がなされていない。契丹大字に関しても文字素の整理を進める必要があるが、文字素数は非常に多いことから、契丹文字フォントを作成し電子的に情報処理できる環境を整える必要がある。契丹大字の異体字を整理するためには、契丹小字資料との比較研究が欠かせないため、大字・小字のフォント作成に加え、利用可能な資料を電子テキスト化する必要がある。

#### 二次文献の収集

契丹文字に関する先行研究には、小数部しか発行されておらず、入手が困難なものが多い。

い。より広く研究者がそれらを利用可能となるべく、資料の収集を行いより多くの研究者が利用できる環境を構築する必要がある。

## (2) 言語学・文献学的研究

契丹文字の解読の進展に伴い、契丹文字によって表記された契丹語についても理解が深まりつつある。しかし、先行研究は文字表記上での分析にとどまっている場合が多く、その背後にある契丹語の文法の研究はまだ十分になされていない。契丹文字資料を漢文資料と対照させ内容の読解を試み、またモンゴル語史の観点から契丹語の諸形式に考察を加えることによって、契丹語の文法記述を進めるのも本研究課題の目的である。

## 3. 研究の方法

### (1) 現地調査

現在、研究書の録文や写真版などの資料のみに頼って契丹文字の研究をすることは困難であるため、資料を所蔵する大学や博物館に直接赴き、文字資料の収集を行う必要があった。具体的には、中国遼寧省および内蒙古自治区での契丹文字資料の実見調査を行った。

### (2) 資料の電子化

収集した資料(拓本・写真等)はスキャナ等を利用し画像データ化した。契丹大字と契丹小字のフォントの作成を行い、公表されている資料の電子テキストの作成を行った。また、契丹文字研究者である故豊田五郎氏の未発表論文の整理を行い、手書き原稿の電子化を進めた。

### (3) 契丹語の文法記述

契丹文字資料を漢文で記された関連する資料とともに詳しく研究し、他の資料での用例との比較や言語学とモンゴル語史の知識を総合することによって資料を読み解き、契丹語の文法の研究を進めた。特に、数詞や複数を表す接辞など、用例が比較的多い語彙や形態素に焦点を当てた。

## 4. 研究成果

(1) 契丹語の言語資料には契丹文字によって記録されたもののほか、『遼史』などの漢文資料中に漢字によって記録されたものが存在する。これら漢字資料は当時の契丹語の音声的特徴を反映していると考えられ、契丹語の音声・音韻の研究を進める上で欠かせない資料と言える。しかし、量的に豊富であるとは言えないため、漢字資料のみを用いて契丹語を研究するのは困難な部分が多かった。本研究課題では、『遼史』に記録された契丹

語の音写を収集し、使用されている漢字の分布を調査することによって、音写された当時の契丹語の音声的特徴および契丹語の音素配列に関する分析を行った。その際には、より正確な結果が得られるよう契丹文字資料のデータも用いた。『遼史』中で契丹語の音写に用いられる漢字には、特定の声母(f-, ts-等)の漢字が使用されないなど、分布に特徴があることは先行研究によっても指摘されていた。より豊富なデータを用いて再検討した結果、声母 kh-を持つ漢字もまた音写に使用されていないことや、有気音声母の漢字と無気音声母の漢字は使用される環境に大きな違いがあり、前者は主に語頭の音写にのみ用いられるのに対して、後者はそのような分布の制限が見られないことが明らかとなった。これらは、契丹語の音声的な特徴や、一部の子音は語頭でのみ出現できたという音素配列に関する特徴を反映したものであると考えられる。契丹語の音素配列に関する研究はこれまでほとんど無く重要な発見と言える。

(2) 契丹語の「東西南北」など方角を指す語がどのように表記されるかについては先行研究によって明らかとなっていた。しかし、1つの方角に対して複数の表記が存在する理由については明らかとなっていなかった。研究の結果、これらの表記は接尾辞-dの有無による音形式の違いを反映したものであることが分かった。接尾辞-dが付加される形式には名詞が後続する例が多く、モンゴル文語に見られる形容詞を形成する接尾辞-du(モンゴル文語 doruna-du「東の」<doruna「東」)と似た振る舞いを示すことが判明した。契丹語の接尾辞-dはモンゴル文語の接尾辞-duと同源であると考えられることが判明した。「東西南北」を意味する契丹語の形式はいずれもモンゴル語のそれと異なっている一方で、派生接尾辞は共有していることから契丹語とモンゴル諸語との系統的親縁関係を研究する上で非常に興味深いデータが得られたと言える。

(3) 契丹語には「数」に関して、「単数」と「複数」の区別があり名詞類の複数性は接尾辞によって示されることが知られていた。しかし、複数の種類がある接尾辞がどのように使い分けられるのかについては十分に明らかにはなっていなかった。研究の結果、名詞類の複数をあらかず接尾辞として-nɛr、-d、-s、-dɔ、-ɲ、-lを認めた。さらに、契丹語の複数接尾辞の分布を分析することにより、接尾辞の分布には接続する語の持つ意味と大きく関係していることが判明した。その分布は有生性の階層の観点から捉えうるものであることを示した。これらの事実はこれまで指摘されたことはなく、契丹語の名詞類の特徴を示す重要なデータといえる。

(4) 契丹語の数詞に関しては、漢字による音写によって一部の語彙の発音が伝わっているほか、契丹文字による数詞の表記の多くが比定されその発音についても議論されてきた。近年の契丹文字研究の進展を踏まえ再検討を行い、契丹小字による数詞・序数詞の表記からその音形式の再構を行った。結果として、従来の再構形を改善することが出来たことに加え、序数の語構成について新たな解釈を示すことができた。例えば、従来は契丹語で「2番目(男性形)」を意味する\*jurerは、語根ju-に序数を形成する接尾辞-rerが接続したものと考えられていた。表記に用いられる文字の推定音価を再検討した結果、この語は\*judeerと復元するのが合理的であり、語根ju-に序数を形成する接尾辞-deerが接続したものと考えられることが判明した。その結果、契丹語と親縁関係にあると考えられているモンゴル諸語の序数(モンゴル文語の形式ji-düger「2番目」など)と近似した語構成を契丹語にも見いだすことが出来ることが分かった。

(5) 東京大国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に寄贈されていた契丹文字研究者である故豊田五郎の研究資料の調査・整理を行った。豊田五郎は長年にわたって契丹文字の研究に携わってきた。豊田の論文は、学会誌や研究書によって発表されたものだけではなく、契丹文字の研究者に豊田自身が個人的に配布していた論文も多く存在していた。しかし、それらの論文は入手が困難であった。豊田の研究資料を整理し論文等およそ40篇をまとめ編集し、『豊田五郎契丹文字研究論集』として出版した。これによって、豊田の契丹文字研究の全体がより広く学界に知られることとなった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

武内 康則、「『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻」『内陸アジア言語の研究』XXX.2015. 1-27. 査読有

Yasunori Takeuchi, “Direction Terms in Khitan” *Acta linguistica Petropolitana* XI. 2015. 453-464. 査読有

武内 康則、「契丹語の複数接尾辞について」『言語研究』149. 2016. 1-17. 査読有

武内 康則、「契丹語の数詞について」『アジア・アフリカ言語文化研究』93. 2017. 91-104. 査読有

〔学会発表〕(計 1件)

Yasunori Takeuchi, “Direction Terms in Kitan” 2015 康平・首届中国遼金契丹女真史研討会、2015年8月16-18日、遼寧省(中国)

〔図書〕(計 1件)

武内 康則 編、豊田 五郎・武内 康則 著、『豊田五郎契丹文字研究論集』京都:松香堂書店、2015、408

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

武内 康則 (TAKEUCHI, Yasunori)  
京都大学・白眉センター・特定助教  
研究者番号: 4 0 7 2 5 3 7 1

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者

##### (4) 研究協力者

( )